

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Postscript

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/3913

あとがき

「ポスト社会主義人類学」というのは、かつてのソ連の領域（現在のロシア連邦、中央アジア諸国、バルト諸国、コーカサス諸国）や東欧、モンゴルを研究しようとする人類学者にとっては、一度は耳にしたことがあるかもしれないが、それ以外の研究者にとってはなじみが薄いことばではないかと思われる。現時点では、共編者の高倉浩樹が序章で述べたように、「旧ソ連およびこれに隣接する諸地域（以下では、旧ソ連圏：ここでは東欧・ロシア・コーカサス・中央アジア・モンゴル・シベリアを挙げておく）の民族誌記述及び人類学考察をすすめる上で、共有可能な一定の視座と方法論が存在し、それにもとづく研究領域が現存する」という認識を共有する研究者たちが、漠然と自分たちの研究をこのように名付けたものである。

これらの地域を覆った社会主義という国家体制の歴史を簡単に振り返ると、次のようになる。1917年のロシア革命によって誕生した社会主義国家は、第2次世界大戦以前にはソビエト社会主義共和国連邦（ソ連）とモンゴル人民共和国（1921年独立、24年社会主義国家宣言）とトゥバ人民共和国（1921年独立、1944年ソ連併合）が成立したにとどまっていた。しかし、第2次世界大戦中の1940年にバルト三国がソ連に併合され、戦後には東欧から東ドイツにまで拡大するとともに、アジアでベトナム民主共和国、中華人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が成立し、1959年にアメリカのすぐそばでキューバ革命が成功することによって、1960年代には世界を二分する勢力へと発展した。これらの社会主義国家群はアメリカを盟主とする西側先進資本主義国家群と鋭く対峙し、その結果「冷戦」と呼ばれる地球規模の政治的、軍事的対立状態が続いた。

しかし、その間に社会主義国家は経済運営に行き詰まりを見せ、社会に閉塞感が漂うようになっていく。それを打開するために、1980年代からソ連と中国という社会主義の二大国で、M・S・ゴルバチョフの「ペレストロイカ政策」と鄧小平の「改革開放路線」という社会経済体制の大胆な改革が始まった。しかし、それが1989年の冷戦終結宣言とベルリンの壁崩壊につながり、引き続きドイツ統一、バルト三国独立、ソ連解体、東欧のビロード革命、ルーマニアのクーデター、モンゴルの民主化、バルカンでの武力紛争といった一連の事件が起きて、ドミノ倒しのように旧ソ連、東欧、モンゴルで社会主義体制が次々と崩壊してしまった。現在、中国、北朝鮮、ベトナム、ラオス、キューバなどに共産党一党独裁による社会主義体制が残るが、これらの国々も市場経済の導入など、資本主義的な経済運営を大幅に取り入れていることから、冷戦時代のような社会主義体制が残るのは今や北朝鮮だけである。

「ポスト社会主義」という政治情勢がいつから始まったかは議論が分かれるところだが、少なくとも、旧ソ連、東欧、モンゴルでは社会主義体制放棄を決めた時点から始まると

見てよいだろう。それはいずれも1990年前後である。これらの国々、地域では旧ユーゴスラビアをのぞいて、冷戦時代にはソ連を模した社会主義体制下であり、ソ連を盟主とする政治的、経済的、軍事的ブロックを形成し、その厳しい統制下にあった。したがって、ソ連の体制がゆるみ、崩壊することでそれ以外の国々で社会主義体制が崩壊するのは必然的であった。しかし、その崩壊の仕方、崩壊後の政治の民主化、経済の市場化の歩みは決して一様ではなかった。その意味で、「ポスト社会主義」という言葉で1990年代以降の状況を一括して捉えることには慎重になるべきかもしれない。まして、このソ連、東欧、モンゴルという広大で多様な地域を調査研究対象とする人類学を、「ポスト社会主義人類学」と呼んで、あたかも共通のパラダイムに支えられた、一個の確立された研究分野であるかのように装うのは危険かもしれない。

しかし、これらの地域では、ソ連型の社会主義体制という国家のあり方が、そこに暮らす人々の生活の隅々にまで浸透し、非常に強い影響を残していたこともまた事実で、それによって生活世界のレベルで、共通の視点、視座、さらには概念を使って調査、研究することが可能だという一面を持つ。人類学者は、政治学者や経済学者とは異なり、人々の実生活のレベルでの調査で得られるデータを基礎にして分析、考察を行うが、一見人々が何気なく行う日常の行為や、生産活動のための組織、あるいは娯楽など、実生活のあちこちに「社会主義体制」の名残を見いだすことができるのである。つまり、政治学者や経済学者が国家レベルで論じる法や制度、建前といったレベルではなく、庶民の日常生活のレベルでも社会主義体制を抜きにしては論じることができないのである。そしてそのような問題を真正面から見据え、人々の日常生活を調査、記述、分析するという研究は、やはり、現場主義に立つ人類学の果たすべき役割ではないだろうか。

1985年に始まるソ連のペレストロイカ政策と平行して始まった、グラスノスチと呼ばれる情報公開政策の一環として、1980年代後半から徐々にではあるが、西側世界の外国人によるソ連国内での人類学的なフィールドワークが可能になった。私が初めてシベリアの先住民族の調査を行ったのは1988年10月で、それは西シベリアからヨーロッパロシア北東部まで広がるネネツというトナカイ遊牧民の調査だった。ただし、このときはNHKの取材に同行するという形だったので、純粋な学術調査目的だけの滞在ではなかった。初めて学術調査の目的で入ったのは極東ロシア、アムール川流域の先住民族ナーナイの村で、それは1990年1月である。その後、ナーナイだけでなく、ウリチ、ウデハ、ニヴフなど他の極東ロシアの先住民族の調査を続け（これらの民族の調査は現在まで継続している）、また1990年代後半にはサハ共和国北部のトナカイ飼育民の調査も行った。つまり、ペレストロイカ時代以来20年近くにわたって極東ロシアを中心にシベリア各地で先住民族の村に入って調査をしてきたわけだが、その中で常々気になっていたのが、シベリアの北西の隅に当たるネネツから極東の東南の隅のウデハまで、村の外観、イメージがどこへ行っても同じことだった。このことはシベリアで調査したこと

がある人ならば、調査地が先住民族の村であろうとロシア系移民の村であろうと、誰でも気づく点ではある。しかし、その徹底ぶりには驚かされる。

縦方向と横方向に整然と敷設された街路、その街路に沿って整然と立ち並ぶ木造家屋、広い校庭をもつ学校、幼稚園、村の中心部には屋根に赤いソ連の旗（ソ連崩壊後はロシア連邦の三色旗）がはためき、ひときわ目立つ村役場（執行委員会）の建物、集団農場などの生産組織の本部、病院、クラブあるいは「文化の家（dom kul'tury）」と呼ばれる公民館のような施設、そして第2次世界大戦（「大祖国戦争」）の犠牲者を弔う戦没者慰霊碑が立ち並ぶ。住宅とされる家屋はいずれも判で押したように丸太を組んだログハウスであり、室内にはロシア風の煉瓦造りのペチカが設置されている。家屋の高さや大きさもほぼ同じである。それもそのはずで、屋敷地も住宅も個人が自由に取得、建設できるものではなく、国家が村役場や生産組織（集団農場や国営農場）を通じて支給するものだからである。また、通りの名称にも必ずマルクス、レーニン、共産主義、コムソモール（共産主義青年同盟）、赤といった社会主義に関係する言葉が入れられている。

シベリア、極東ロシアの先住民族には街路を敷設して建物を整然と配置する、構造化された村落を建設するような伝統はなかった。トナカイ遊牧民はテントに暮らし、家畜を追って移動を繰り返す生活をしており、アムール川のような巨大河川の流域に暮らす漁業を生業の柱とする人々は、川岸に一行に家を建て並べるような村を形成していた。むろん村の中に直線的な通りを通すというような考え方はなく、人が歩くところが道になった。ソ連政府はそのような先住民たちの村やキャンプでの生活を「未開」とであると断じ、彼らを「近代化」させ、史的唯物論でいうところの奴隷制や封建制、さらには資本主義社会すら飛び越えて、一気に社会主義社会を実現させようとしたのである。その象徴的な政策が「都市型村落（posyolok）」と呼ばれる規格化された人工的な村落の建設だった。そのような村落は1930年代からシベリアの先住民族の地域で次々に作られはじめ、1950年代～60年代の生産単位の統合と拠点集落への集住化政策によって完成する。その構造はヨーロッパロシアの農村に建設された村と同じであり、先住民族、移民に関係なく適用された。

先住民たちの生活も規格化された。例えば食事である。食文化は民族、社会、地域によって実に多様なはずである。実際その土地でしか食べられない料理も少なくない。しかし、他方で、旧ソ連地域ではどこへ行っても似たような料理や似たようなマナーに出会う。例えば、パン類、シチュー類（ボルシチ、サリャンカなど）、ロシア風の小型で丸い餃子、ジャガイモ料理などである。そして、パンを主食としてスープ、メインディッシュ、デザートの順に食べる（私はモンゴルでも、レストランや晩餐会にこの食事マナーが浸透していることに驚かされた）。おそらくそれらの普及には、政府の強い指導が入っているのだろうが、学校での給食も強い影響力を持っていたと考えられる。子供たちは学校でロシア人の先生に学び、ロシア人の料理人あるいはロシア料理を習った地元の料

理人が作る給食を食べることで、舌がロシア料理になじむようになる。つまり、子供を通じて、人々の間にロシア風の食生活が定着していったのである。

このような点は、先住民社会における画一的なロシア化、あるいは社会主義文化の浸透としてとらえられていて、人類学でも他の学術分野でもそれ以上の説明はなされなかった。調査に協力してくれた現地の人々自身も、そのように意識し、説明していた。そのために、私も今までの著述ではまともに取り上げたことはない。しかし、ロシアでの調査の回数を重ねていくごとに、そこには何かがあるのではないかという思いは募っていた。

今回、共同研究という場で「ポスト社会主義人類学」の枠組みを検討することで、ようやくその何かが見えてきたような気がする。それは、先住民たちの現在の村の姿や食事風景も、高倉浩樹が序章で述べたように、「伝統・社会主義・現在という歴史的位相を同時代分析のなかで読み込む」ことによって理解できるのではないかと、いうことである。先住民社会独自の村の形や家の建て方、食材や食事マナーを「伝統的」なもの、あるいはロシア革命以前のものとし、ソ連型の村落やロシア風の食事風景を社会主義時代の影響といってしまうのはたやすい。現在は先住民のどの家庭にもテレビや冷蔵庫はおろか、DVDプレーヤーや携帯電話、パソコンまで普及しているが、それを現代のグローバル化現象として伝統文化や社会主義文化と区別することも可能である。しかし、現実にはこの3者が同時に存在し、同時に機能し、現時点での文化の中でそれぞれ位置づけを与えられている。いってみれば、伝統、社会主義、現在という歴史的位相がざっくりと社会の中に練り込まれたような感じになっているのである。調査者がすべきことは、そのような社会を的確に記述し、分析し、解釈することである。そのとき、「社会主義」という思想、体制は避けて通ることができない要因であり、それが練り込まれている社会の記述、分析に対しては、非社会主義地域のフィールドで確立された従来の西側人類学の概念やパラダイム、理論的枠組みでは対応できない。やはりそれ専用のものが必要なのである。

「ポスト社会主義人類学」は、社会主義体制、それもソ連型の社会主義体制が残した様々な影響を日常生活のレベルで掘り起こしながら、現代の旧ソ連、東欧、モンゴルといった地域の社会を記述、分析、解釈することを目指している。そして、そこから生まれた概念と理論を、現代社会を的確に捉えるための、人類学的方法論の確立に寄与できるように鍛え上げることも目標の1つとしている。ソ連が崩壊してすでに17年を経て（2008年現在で）、今はもはや「ポスト社会主義」という時代ではないのかもしれない。社会主義時代と現代の間には、1990年代の混乱期が挟まっていることから、ポスト「ポスト社会主義」の時代というべきだろうか。あるいは、地域ごとに異なる道を歩み始めていることから、ヨーロッパロシア、シベリア、極東、中央アジア、東欧、バルト、コーカサス、モンゴルを1つの研究対象地域として一括するような考え方は、もはや通用しなくなっている可能性もある。ならば、現実をよりの確に把握できる、研究上の地域的

枠組みはどのようなものであるべきだろうか。本書で取り上げられた各地の事例は、それを考えるための手がかりを示している。

本論集に寄稿してくれた著者はいずれも20代から40代初めまでの「若手」,「中堅」の世代に属する研究者たちである。私事で恐縮だが、実はこの論集の執筆者の中で、50代にさしかかった私が最年長になってしまっていることに愕然としている。しかし、1980年代にシベリア研究を志した頃に比べると、現在の旧ソ連地域、東欧、モンゴル地域を研究する人類学者の層の厚みには目を見張るものがある。20年前ならば、この地域に関する人類学的な論集を作ろうとしても、おそらく執筆者を募るのに相当苦勞しただろう。それに対して、今回は17人もの研究者が寄稿した。しかも、コーカサスを除いて、ソ連型社会主義体制を経験した地域のほぼ全域をカバーしている。それだけ、若い世代がこれらの地域に積極的に飛び出し、新しい研究領域を開拓しているのである。その開拓される領域は人類学の中だけでなく、民俗学、考古学、言語学、歴史学、さらには理系や文理融合型の諸分野にも及んでいる。

本書で「ポスト社会主義人類学」と銘打ったこの研究は、若い領域であり、まだまだ伸びる可能性を秘めている。また、人類学の深化、発展に寄与するところも大きいと考えられる。本書を手にした方々の叱咤激励によって、この研究領域が将来さらに発展していくことを切に願っている。

2008年12月

佐々木 史 郎